

【旧約聖書日課】列王記下 5章1～19節

¹アラムの王の軍司令官ナアマンは、主君に重んじられ、気に入られていた。主がかつて彼を用いてアラムに勝利を与えられたからである。この人は勇士であったが、重い皮膚病を患っていた。²アラム人がかつて部隊を編成して出動したとき、彼らはイスラエルの地から一人の少女を捕虜として連れて来て、ナアマンの妻の召し使いにしていた。³少女は女主人に言った。「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえますでしょうに。」⁴ナアマンが主君のもとに行き、「イスラエルの地から来た娘がこのようにを言っています」と伝えると、⁵アラムの王は言った。「行くがよい。わたしもイスラエルの王に手紙を送ろう。」こうしてナアマンは銀十キカル、金六千シェケル、着替えの服十着を携えて出かけた。⁶彼はイスラエルの王に手紙を持って行った。そこには、こうしたためられていた。

「今、この手紙をお届けするとともに、家臣ナアマンを送り、あなたに託します。彼の重い皮膚病をいやしてくださいますように。」⁷イスラエルの王はこの手紙を読むと、衣を裂いて言った。「わたしが人を殺したり生かしたりする神だとも言うのか。この人は皮膚病の男を送りつけていやせと言う。よく考えてみよ。彼はわたしに言いがかりをつけようとしているのだ。」⁸神の人エリシャはイスラエルの王が衣を裂いたことを聞き、王のもとに人を遣わして言った。「なぜあなたは衣を裂いたりしたのですか。その男をわたしのところによこしてください。彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」

⁹ナアマンは数頭の馬と共に戦車に乗ってエリシャの家に来て、その入り口に立った。¹⁰エリシャは使いの者をやってこう寄せた。「ヨルダン川に行つて七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」¹¹ナアマンは怒ってそこを去り、こう言った。「彼が自ら出て来て、わたしの前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病をいやしてくれるものと思っていた。¹²イスラエルのどの流れの水よりも Damas の川のアバナやバルバルの方が良いではないか。これらの川で洗って清くなれないというのか。」彼は身を翻して、憤慨しながら去って行った。¹³しかし、彼の家来たちが近づいて来ていさめた。「わが父よ、あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそれとおりにさったにちがいません。あの預言者は、『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか。」¹⁴ナアマンは神の人の言葉どおりに下って行って、ヨルダンに七度身を浸した。彼の体は元に戻り、小さい子供の体のようになり、清くなった。

¹⁵彼は随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立った。「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。今この僕からの贈り物をお受け取りください。」¹⁶神の人は、「わたしの仕えている主は生きておられる。わたしは受け取らない」と辞退した。ナアマンは彼に強いて受け取らせようとしたが、彼は断った。¹⁷ナアマンは言った。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこの僕にください。僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることにはしません。¹⁸ただし、この事については主が僕を赦してくださいますように。わたしの主君がリモンの神殿に行つてひれ伏すとき、わたしは介添えをさせられます。そのとき、わたしもリモンの神殿でひれ伏さねばなりません。わたしがリモンの神殿でひれ伏すとき、主がその事についてこの僕を赦してくださいますように。」¹⁹エリシャは彼に、「安心して行きなさい」と言った。

【福音書日課】 マタイによる福音書 15章21～31節

²¹イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。²²すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。²³しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」²⁴イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。²⁵しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。²⁶イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけません」とお答えになると、²⁷女は言った。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」²⁸そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

²⁹イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。³⁰大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。³¹群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。

パン屑をいただく【こども説教のために】

主イエスは、ご自分の生まれ育ったユダヤやガリラヤの人々の町や村を巡って旅をされました。けれども、ときにはユダヤから離れた地やガリラヤ湖の向う側の地を巡られることもあったようです。主イエスは、そこでも教え、病気の人を癒されたのです。

ティルスとシドンの地方に行かれたときのことです。主イエスは、その地に住むユダヤ人に会おうとなさっていたのかもしれませんが。ところが、そこに、カナン人の女性がやってきました。彼女は、悪霊に苦しめられている娘を助けてほしいとしきりに願うのです。弟子たちは心配して言いました、「この女を追い払ってください」。意地悪で言ったものではありません。「この女の願いを早く聞いてやって、先に帰らせてください」と考えたのです。叫んで助けを求め続ける女に向かって、とうとう主イエスはおっしゃいました、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけません」。主イエスは、まずユダヤ人に必要なものを与えようとお考えだったのです。けれども、女は答えて言います、「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」。主イエスは、その答えを聞いておっしゃいました、「あなたの信仰は立派だ」。

彼女は、主イエスの教えられる神が、ユダヤ人であろうとそうでなかろうと分け隔てなく、食卓からこぼれ落ちるほどのパンをお分けくださる方、恵みをお与えくださるお方だと信じて、願ったのです。「神の子」と呼ばれる者にも、そのように呼ばれていない者にも、神は、恵みの糧をお与えくださり、養ってくださいます。そうして、悪霊から解放してくださるのです。

立派な信仰

今年も春の訪れを前に、幾人かの方と洗礼準備会を始めています。復活祭（イースター）、あるいは聖霊降臨祭（ペンテコステ）の祝いの中で洗礼の恵みにあずかることを目指して、必要な備えをしていただいています。そのような洗礼志願者を受難節（レント）の初めに公にして、志願式を執り行う教会もあるようですが、わたしたちにはそのような習慣がありません。それでも、今教会の中に洗礼を願って準備を始めている方々があることをお知らせするのは、皆さんにこのことを憶え、共に歩んでいただきたいからです。

洗礼は、キリストに結びついて新しく生まれること、新生だと言われます。新しい命を与えてくださるのは神、生まれさせてくださるのはキリスト、生まれてくるのは本人ですが、生み出すのは教会です。洗礼は、キリストが教会に命じられて執り行うようになったことなのです。キリストに従う者を洗礼によって生み出すようにと、弟子たちに命じられました、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」（マタイ 28:19~20）と。

準備会に臨んでくださる方はどなたも、すでに志の与えられている方々です。もちろん、ときには準備会を進めていく途上で立ち止まり、ご自分の思いを問い直された結果、洗礼にあずかることを先延ばしにされる場合もあります。このタイミングではない、この教会ではない、この道ではない、と言った思いを抱かれたならば、無理に洗礼式に引き出すことはできません。ただ、まだ聖書の学びが十分ではないとか、まだしっかりとした信仰が備わっていない、と言うような理由で洗礼を先延ばしにする必要はないでしょう。すでに洗礼を受けている者ならば知っていることですが、わたしたちの中に聖書の学びが十分な者など、一人もいません。揺るがない確かな信仰を確立した者など、一人もいません。それは、牧師であっても同じです。

主イエスに娘の癒しを願って叫び続け、最後には「**あなたの信仰は立派だ**」とお告げいただいた、カナンの女がいました。ユダヤの民、イスラエルの民ではありません。異国の文化の中で生きてきた者です。聖書の話など聞いたこともなかったかもしれません。宗教は先祖伝来の神々を祀るものだったでしょうが、そこに信心がどれほどあったかわかりません。それでも、彼女は、一人の人と出会いました。ご自分の同胞らの中で「神の子ら」として誠実に生きることを教え、導く一人の方、主イエスです。このお方と共にいる者たちの間からあふれ出るものがあることを、彼女は知ったのです。このお方とその弟子たちに、あふれ出るほどの恵みを注がれる神のあることを、彼女は知ったのです。ただそれだけです。それが、彼女の信仰でした。

おこぼれにあずからせる

彼女の信仰を「小犬の信仰」と呼ぶことがあります。「**子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない**」と言われた主イエスに、「**小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです**」と応じた彼女の信仰を、そう呼ぶのです。主イエスが「立派な信仰」とお認めくださった信仰なのです。

もっとも、「小犬の信仰」という表現をあまり好まない方もあるかもしれません。「子供」であれば、たとえ小さくても家族の一員として、きちんと食卓に着いて食事を共にするでしょう。現代人は、「小犬」も家族同然、同じ食卓に着かせて食事をさせるかもしれませんが、主イエスとカナンの女の対話で出てくる「小犬」はそのような存在ではありません。家族の一員に数えられないところで、ただ主人の気前良さに甘えて、食卓の下にこぼれ落ちるパンにあずかろうとしている存在です。そこでは、食卓のマナーも、お行儀も問われなんでしょう。家族の一員として責任を負わなくても、やさしい主人がいるので、その家から追い出されることもないのです。家族の一員として食卓に着く「子供」たちは、日々、食卓のマナーを問われ、家族の一員としての責任を求められ、成長を促されるのに、「小犬」はいつまでも「小犬」のまままで許されている。そうだとしたら、そのような「小犬の信仰」が果たして「立派な信仰」と言えるのかと、疑問に思われる方もあるかもしれません。「小犬の信仰」を認めるとしても、いずれは、食卓に着く「子供の信仰」になり、「主人に倣う信仰」へと成長していくことを目指すべきではないか。そう考える方があっても、当然でしょう。

けれども、主イエスは、この女の信仰を「立派だ」とお認めくださったのです。食卓からパン屑が落ちるにまかせて小犬を養ってくれる主人の存在を、彼女は知っていたからです。その主人のようなお方の存在を、彼女は認め、そのこぼれ落ちる恵みにあずかり、養われる者であらうとしていたからです。

「**あなたの願いどおりになるように**」と、主イエスは彼女に告げられました。それは、主イエスが弟子たちに祈りとして教えられたのと同じ言葉でした。「**御心が行われますように**」(マタイ 6:10)。わたしたちが「主の祈り」として受け継いでいる祈りの言葉の中の一句です。それは、主イエスが最後の晩にゲッセマネで祈られた言葉の中の一句でもあるのです。「**わたしの願いどおりではなく、御心のままに**」(同 26:39)。

天の父の御心が、あなたの願いとなって、行われるように。主イエスは、彼女に対して、そう願ってくださったのでしょ。う。いいえ、すでにそうなっていることを喜ばれたのです、「**あなたの信仰は立派だ**」と。それが「小犬の信仰」です。おこぼれにあずかる信仰です。いいえ、すべての人におこぼれにあずかっていたらこうという、わたしたち教会の信仰なのです。